
私とワニとピラニアと

和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とワニとピラニアと

【Nコード】

N2247A

【作者名】

和

【あらすじ】

私の家の風呂は、一風変わっている。多分、こんな風呂、どここの家にもないだろう。といっても、別に浴槽が広いわけでも、深いわけでもない。地下から温泉を汲み上げて使用しているとか、名湯をわざわざ有馬からトラックで運んできてそれを使用しているとかいう訳でもない。見た目は、ごく普通の風呂だ。青いタイル張りの壁に、白い浴槽。小さな鏡と、いつも水が溜まっている石鹸置き。高い位置にある格子のついた窓には、錆びかけた銀色の枠。カワックもジ

エ
ッ
ト
バ
ス
も、
そ
れ
ど
こ
ろ
か
湯
沸
か
し
器
す
ら
付
い
て
い
な
い。
け
れ
ど、
私
の
家
の
風
呂
は
特
別
だ。
何
故
か
っ
て？
そ
れ
は。

二匹の魚

ワニある7月の夜、私はいつも通り、風呂に入る

「準備」

をした。

まずシャワーで浴槽の内側を軽く洗う。

それからお湯をはるわけだが、

湯沸かし器がついていないから、水道の蛇口を捻ってまず水を出す。それからゆっくりとお湯の方の蛇口を回してお湯を出していく。

蛇口から出るお湯が丁度いい温度になったら浴槽にふたをして、そのまま放置する。

しばらくして、もうそろそろかな、と思ったらお湯を留めにいく。

私はよく、テレビに夢中になってお湯を留めに行くのを忘れて、気が付けば、浴槽からお湯がだぶだぶと溢れていた、なんてことがよくあった。

その日も私は水の蛇口とお湯の蛇口を捻って、熱すぎず、ぬるすぎない丁度良い温度のお湯を作り出し、浴槽にふたをしてその場を離れた。

20分ぐらいたったころだ。

そろそろいいかな、と思い、お風呂のお湯をとめに向かった。

お湯は丁度良いくらいに溜まっていた。

右手をそっとお湯につけた。

うん、良い温度だ。

私は風呂に入ることにした。

服を脱いで裸になって、勢いよく風呂のドアを開ける。

シャワーで体を一通り洗い終え、湯につかることにする。

そこまではいつもと変わらなかった。

そこからがいつもと大きく違った。

浴槽の中に、何か小さな動くものがある。

「・・・・・・？」

何だ？と私は水面に顔を近付けた。

それは浴槽の中を泳ぎ周っていた。

魚、だった。

「・・・・・・っ！！！！！」

私は驚きのあまり、喉が硬直して声も出なかった。

その場に尻餅をつく。

足がぐくぐくと震え、全身に鳥肌がたった。

何故魚が??

何故？なぜ？ナゼ？

私の頭は混乱状態だった。

パニックに陥っていた。

以前風呂場で、ゴキ●リに遭遇した時もこんな感じだった。

私は必死になって風呂場からはいずり出た。

バスタオルで体を隠してその場にへたりこんだ。

魚。

誰かのいたずらだろうか？

いや、この家には私一人しかいない。

父と母とおばあちゃんと6歳下の弟は新潟で楽しく暮らしている。

福岡で一人暮らしのこの私の家には、当たり前だが私一人しかないな

いのだ。

もしかして誰かが不法侵入して、

人ん家の風呂の浴槽に魚を逃がしたというのか?!

有り得ない。

絶対に有り得ない。

そんな事を考えているうちに、

私の頭は冷静さと落ち着きを取り戻した。

見間違いかもしれないじゃないか。

うん。そうだ。きつと見間違いだ。

水面に映る自分の影が魚に見えたんだ。

絶対そうだ。

私は大きく息を吐くと、拳にぎゅっと力を入れた。ずっとこうしている訳にはいかない。

さっきのは見間違いだろうから、

魚なんて本当はいないのだから、

お湯が覚めないうちにお風呂に入らなくてはならない。

私はゆっくりと立ち上がった。

お風呂のドアをそっと足のつまさきで蹴って開ける。

浴槽のふたは半開きのままだった。

おもいきって中を覗く。

見間違い、ではなかった。

魚が、泳いでいた。

20センチぐらいの鈍くて青い銀色をした魚が二匹。

浴槽の中を泳いでいた。

よく見ると、海草らしきものも漂っていた。

何故？

私はおもいきって湯船に手を右手をつけてみた。

冷たい。

お湯を入れていたはずなのに、冷たい。

まさかと思って、湯船につけた右手の人差し指を舐めてみる。

しょっぱい。

お湯を入れていたはずなのに、しょっぱい。

お湯が海水に変わっている。

その中で魚が泳いでいる。

お風呂の中が小さな海になっていた。

それでも今度はパニックに陥ることはなかった。

お風呂のお湯が海水になってその中で魚が泳ぎ、海草が漂っている。

それは事実なのだ。・・・信じたくないが。

自分の首に爪を立てて、引っかいた。

痛かった。夢じゃあない。。

私は取りあえず着替えをすませて網を探した。

網は押し入れの隅にあった。

ほこりをかぶったビニールを手際よくとると風呂場に向かった。

「はぁ」

大きなため息が一つ出た。

「つかれた・・・。」

私は6畳の畳の部屋に布団をしいてその上にダイブした。

固い布団は私を受け止めて、枕からジャリっとした感触が伝わった。

「はぁ」

またため息が出た。

時計の針は午後11時過ぎを指していた。

隣人

あれから私は浴槽の中の二匹の魚と格闘した。
とりあえず風呂のお湯、いや、海水を抜いた。

ある程度海水が減ったところで魚を網で捕まえて、
とりあえず一匹ずつ洗面器に入れた。

ところがそれからまずい事に気が付いた。

私の家には水槽がないのだ。

洗面器の中の海水だけでは、この魚は翌日の朝には天国に召されて
いるだろう。

それはまずい。

大いにまずい。洗面器の中で死なれては困るのだ。

もし洗面器の中で大往生されたりしたら、

気持ち悪くてとてもじゃないがその洗面器は二度と使えない。

かといって、私だって風呂に入りたい。

私はとりあえず風呂の湯を入れ直すことにして、

その間に、この洗面器の中の魚をどうするかに頭を悩ませることに
した。

この時点で時刻は午後9時をまわっていた。

私は考えに考えた挙げ句、

ビーーーーッ。

私はアパートの

「乃木」

という古ぼけた表札のかかった部屋の呼び鈴を押した。

音がピンポンじゃない辺りに古さを感じる。

乃木さんは私の部屋の右隣に住む人で高校で理科の教師をしている。
何を教えているかは知らないが、

もしかして生物学とかを教えているなら、

水槽とか持っていそうだと偏見じみた考えて私は乃木さんを頼る

ことにした。

ビーンツ。

もう一度押した。乃木さんは出てこない。

「もしもし、隣の204号室の私ですけどー。」

扉をドンドンと叩きながら叫んでみた。

扉の向こうで物音がした。

中に誰かいるらしい。居留守を使っているのか。

「もしもしー」

私は更に扉を叩いた。

と、

「もしもし」

を数回連呼したあとで、急にドアが開いた。

中から一人の男性が出てきた。

無精ひげに、度のきつそうな黒ぶち眼鏡をかけた、三十路過ぎのおじさん、

この人が乃木さんだ。

乃木さんは眠そうな目で私を見ると

「何でしょうか？」

と眠そうな声で呟いた。

「魚を死なせたくないんで、水槽が欲しいんですけど、

乃木さんもしかしたら持ってませんか？」

私は状況を簡潔に説明した。

風呂の水が海水に変わってその中に魚がいた事は省くことにした。

言ったとしても、事がややこしく複雑になるだけだ。

乃木さんは私のそんな説明を訝しげに聞いていたが、

私の顔が少し必死だったからだろうか、

深く尋ねてはこなかった。

乃木さんは

「少し待っていて下さい」

と言って部屋に引っ込んでいた。

私はドアの前で数分待たされたが、次に乃木さんが出てきた時、

乃木さんはその両手に一つの水槽を抱えるようにして持っていた。

「以前ハムスターを飼っていた時の水槽です。」

そう言っつて乃木さんは私に水槽を手渡してくれた。

私の腕時計の針は10時を指していた。

まずい、風呂の湯を出しっぱなしだ。

その事に気が付いたので私は乃木さんへの感謝の気持ちもそこそこに自分の部屋へ急

いで戻った。

玄関で適当に靴を脱ぎ捨て、ダッシュで脱衣所へ向かう。

風呂のドアを開けると、

もくもくと白い湯気がせめてきた。

お風呂のお湯はだぶだぶと溢れていた。

「・・・・はあ」

足元には二個の洗面器。

中には魚。

深いため息が出た。

それから私はお風呂のお湯をとめて、

水槽に塩水をつくり、その中に二匹の魚を入れて、

とりあえず六畳の部屋にその水槽を置くことにした。

その作業が終わってようやく風呂に入ることができた。

今度魚が泳いでいたらどうしようかと思ったが、

普通のお湯がそこにはあった。

長かった。本当に長かった。

風呂に入るまでにこんなに苦労したことは今までになかった。

私は足も充分に伸ばせない浴槽の中で、

体育座りしながら、ほっと一息ついた。

そして今に至る。

私は髪もろくに乾かさず、布団の上でうつ伏せになって、じっとし

ていた。

少し視線を横にやればそこには二匹の魚が泳ぐ水槽。

調べてみたらその魚はイワシであることが分かった。

明日魚のえさをペットショップに買いにいかねばならない。

私はいつの間にか意識がなくなっていた。

私はいつの間にか眠りの世界へ引込まれていった。

そしてその悲劇は終わらなかった。

おかしげな日常

そしてその悲劇は終わらなかった。

次の日も風呂の湯は海水に変わった。

今度はたつのおとしごがふよふよと水中を漂っていた。

私は隣の部屋の乃木さんにまた水槽をもらいにいった、

乃木さんは以前カブトムシを飼育していた時に使っていた水槽をくれた。

二度あることは三度ある。

その次の日も風呂の湯は海水に変わった。

今度は珊瑚礁のかけらが沈んでいた。

私はそれを一つ一つ拾い集めた。

三度あることは何度でもある。

風呂の湯は毎日、毎日、海水に変わった。

ある時は鰭が泳いでいてまたある時は、タコが浮いていた。

湯船に石油がどろどろと浮いている日もあった。

その日のニュースでタンカーが太平洋沖で挫傷したと報道された。

ビンや汚いごみ、腐った木がぷかぷかと浮いている日もあった。

ビンに書かれた文字はミミズのようにくねっていて読めなかった。

どうやら私の家の風呂の浴槽は、

1日に一回、海と繋がるらしい。

どう考えたって他の理由は思い付かなかった。

8月の観光シーズンには

浴槽に浮き輪が浮いている日もあった。

9月には一つのビンが流れ着いた。

中には英語で書かれた紙が入っていた。

「SOS

Long 145° W

Lat、18° N

Help

Help

・

Aristotle-I」

その日のニュースでアメリカの船舶、アリストテレス二号が嵐に合い遭難し、

機器の破損により遭難信号その他無線がつかない状態にあると伝えられた。

もしやと思い私は海上保安庁に匿名で

「アリストテレス二号、西経145度、北緯18度」

と

送ってみた。

後日、その船舶は無事救助されたらしい。

10月になって鮭の死体が浮いていた。

さすがに気持ち悪かったが、

使命を全うした彼らを敬って土に返した。

この辺りから、私の家の風呂は川とも繋がるようになったみたいだ。

11月には、数匹のピラニアが浴槽に現れた。

アマゾン川と繋がったらしい。

さすがにこれは飼うことはできなかった。

ごめん、ピラニア。

私はそういつて塩素のきつい漂白剤と合成洗剤を大量に湯船に入れた。

12月には氷が現れた。

どうやら極寒のオホーツク海と繋がって、

流水がきてしまったらしい。

熱湯を注ぎこんで溶かしたが、

その月の光熱費が先月に比べ倍近くかかった。

そんな間にも私の家の風呂はしっかりと海にリンクして、

海の幸を浴槽に送り続けた。

私は何度も乃木さんに水槽を借りにいき、
私の六畳の部屋は海産物の詰まった水槽で埋め尽くされた。
新潟の父と母が来たら、さぞかし驚くだろう。
かといってどうすることもできない。
しばらくは忙しいから、そういつて誤魔化すことにした。

そしてワニ

1月になってワニが来た。

ミシシッピー川と繋がったのだろうか。

とうとう爬虫類までやってきたのだ。

そのワニは子供だった。

私は今回こそは本気で悩んだ。

ピラニアの時と同じ対処法をとるべきか。

それとも飼うべきか。

いや、大きくなったらどうする？

こいつはとても狂暴になるかもしれない。

むつ●ろうさんがライオンに指を食い千切られたように、

私もこのワニに指を食われるかもしれない。

それは絶対御免だ。

私はむ●ごろうさんの様に寛大な心なんて持ち合わせていない。

無責任だが、このワニが成長しだしたら身の安全を考えて近所の川に放流した方がいいだろうか。

この近所でいうと、筑後川だ。

もし放流したとしたら、世間は大騒ぎだろう。

あの埼玉のタマちゃんみたいに。

キーホルダーや携帯ストラップが売り出されたりするかもしれない。

いや有り得ないけど。

私はとりあえず、ワニを洗面器に移そうと網を手にとった。

もうこの作業を何十回と繰り返してきたからだろうか、

私はスムーズにワニを洗面器に移すことができた。

「ねえ・・・君はどうしたい？」

ワニにそっと話し掛けてみた。

そのワニは小さな目を少しだけ開けて、私を見た。

「合成洗剤入れてもいい？」

ワニは勢いよく首を横に振った。
ように見えた。

「筑後川に流してもいい？」

ワニは同じように首を横に振った。
ように見えた。

「なら、ここに住む？」

ワニはゆっくりと頷いた。

私は信じられなかったが、このワニはどうやら人間の言葉が分かるようだ。

しかも日本語を理解しているらしい。

ミシシッピー川から来たんじゃないのか？

アメリカ生まれなんじゃないのか？

この際気にしないことにした。

私はワニをそっと掴んでみた。

ワニは私の両手に丁度よくおさまり、頭としっぽが少し、手のひらからはみ出していた。

ごつごつした感触の中にどこか柔らかさがあった。

前足の指は5本、後ろ足の指は4本、後ろ足には指と指との間に水掻きがついていた。

黒い目はじっと私を見つめていた。

子供ながらに生死の狭間を生き抜いてきたようなその鋭い目は、子孫を残す為に生きる。そんな野生動物独特の威圧感に満ち溢れていた。

私はそのワニにクロコと名づけた。

奇妙な共同生活が始まった。

私は図書館に行ってワニの生態を調べた。

餌もハムなどのやわらかい肉をすりつぶして与えた。

歯が丈夫になってくると、少し固い肉も与えてみた。

ワニの好む環境も水槽の中に作り上げた。

日本語を教えたりもした。

「い」

私はそういつて広告のチラシの裏に油性ペンで

「い」

と書いた。

それをクロコに見せる。

「ろ」

私はそう言つて

「い」

の横に

「ろ」

と書いてクロコに見せた。

「は」

「に」

「ほ」

「へ」

同じ作業を繰り返した。クロコは少しずつ喋れるようになった。

2月の初めになって、

クロコはすっかり喋るようになった。

片言の日本語だが、確に自分の意志を口にした。

初めて私の名前を呼んでくれた時には少しだけ涙が溢れた。

クロコはどんどん成長した。

その間にももちろん、私の家の風呂の浴槽は海と川とリンクして、色々な生物を送ってくれた。たまにクロコのエサになるようなものも現れた。

少し淋しい一人暮らしだった私は、

そんな日常に、どこか逃避するように、浸透していったのかもしれない。

血

その日は二週間に一度のクロコの身長測定の日だった。クロコは随分大きく成長していた。

クロコのしっぽから頭の先まで、メジャーをピンと伸ばして測る。

「68、4cm。」

随分大きくなったねクロコ。

私は笑顔でそうクロコに話かけたが、いつもなら

「ああ。餌がいいからな」

とか答えてくれるクロコが今日は違った。

様子がおかしかった。

「どうしたの？クロコ、気分でも悪い？」

風邪でもひいたかな？

私はクロコの額をさすろうと手を伸ばした。

その瞬間、クロコの尻尾が急に私の脇腹に勢いよくヒットした。

目にもとまらぬその早さに私は一瞬何が起こったのか分からなかった。

が、直後、脇腹に激痛が走った。

中身が出てきそうなくらい痛かった。

そして目に赤いものが見えた。

それは床に垂れて、広がっていく。血だった。

遅れて右手が裂けるように痛んだ。

クロコが私の右手に噛み付いていた。

その時のクロコの目はまさに野生の“その目”だった。

そう、クロコは野生のワニなのだ。

生き物本来が持つ反射という反応。

何を今更、気付いてるんだろ。

私は今まで分かっていたつもりでいた。

クロコは野生のワニ。

私は世間のヒト。

違うんだ。

違うんだ。

そんなこと、初めから知っていたつもりで今までを過ごしてきた自分がひどく愚かな存在に思えた。

クロコはまだ私の手に噛みついたままだ。

血はさらに出血している。

痛い。痛い。痛い。

クロコは私の血をどう感じているのだろうか？

私の血は美味しいのか？

それからのことは覚えていない。

BYE—BYE

手の甲から、内側の手のひらにかけて。15針縫う怪我だった。

医者はひどく心配してくれた。

クロコは私の手に噛み付いたあと、なかなか離れてくれなかった。

鋭い歯を私の皮膚に食い込ませるだけでなく、

私の手を食い千切ろうとその歯を左右にすりあわせるように動かす。

私は必死になってクロコの口を顎を足ではさみ、左手で口をこじ開けた。

その後は覚えていない。

無我夢中で乃木さんの家の扉を叩いて中から出てきた乃木さんに救急車呼んでもらったらしい。

私はパニックになって電話一つかけることさえできなかった。

乃木さんは私を詮索しなかった。

病院までついてきてくれて、その後

「お大事に」

とそれだけ言うとは帰っていった。

私は医者から痛み止めの薬をもらい、一人家路についた。

どうしてクロコは私にかみついたんだろう。

そんな薄暗い気持ち私が私の心を取り巻いた。

「ただいま」

部屋のドアを開けると、玄関にクロコがいた。

私とクロコは無言で見詰め合った。

もともとクロコは野生のワニなのだ。

いつまでもここにすることはできない。

そろそろ決断が必要だった。

潮時なのかもしれない。

先に口を開いたのはクロコだった。

「この家を出る」

そう一言だけ呟いた。

私は玄関にしゃがみこんでクロコとなるべく視線の高さを同じにした。

「どうして？」

聞き返す。

「理性が持たないんだ。野生のハンターとしての血が、体の中で騒いでいる。」

その口調は深刻で重々しかった。

「今回は手だけですんだけど、次はそうとは限らない。もしかしたら本当に食ってしまうかもしれない。」

体が成長するにつれて抑制できなくなってきた。」

その目は、クロコがまだ手の平に収まるぐらい小さかったあの頃の、あの鋭い目と同じものだった。

あの頃からクロコは野生のワニだった。

そして今も。

人と一緒に生活したって、クロコが野生のワニなのは変わらない。

クロコはいつか野生に戻らなければならなかった。

それが今なんだろう。

私はゆっくり頷いた。

「そうだね。クロコ、楽しかったよ。今まで。」

目が熱くなった。

視界がじわっと歪む。

声は震えていた。

「楽しかったよ。ありがとう」

一人暮らしの私の、一時の同居人、野生のハンタークロコ。

クロコは黒い目を細めて伏せた。

その目にはうつすらといつもはない透明の膜が見えた。

「俺も楽しかったよ」

涙はお互いに隠し合うものだ。

私は大きな茶色い旅行鞆にクロコを詰め込んだ。

クロコ自身の願いで、クロコの口には布がきつく巻いてある。噛み付かないように自我を押さえるため、とクロコは言った。家を出る時、隣室の乃木さんとばったり会った。

乃木さんは私の大きな旅行鞆をちらりと見て

「旅行ですか？」

と聞いてきた。

「はい。ちよつと近くの河原まで」

私は事実を言った。

乃木さんはそれ以上は聞いてこなかった。

「気を付けていってきて下さい。」

その優しい言葉に見送られて私はアパートを後にした。

私とクロコは今、河原で別れようとしていた。

私はクロコの口の布をとった。

「なあ」

クロコは言った。

「この川は俺の故郷と繋がっているんだよな」

私はうん。と短く答えた。

クロコはその答えに満足そうに頷いた。

私とクロコは今、そう、まさに今、

この河原で別れようとしていた。

「忘れないよ。クロコ」

クロコはしばらくの間私を見つめていたが、ゆっくりと水辺へとはっていった。

「ありがとう、クロコ！」

私は叫んだ。

クロコはその尻尾を一度、大きく振った。

夕暮れの河原に映る夕日の赤が、私達を包んでいた。

私の家の風呂は、一風変わっている。

多分、こんな風呂、どこの家にもないだろう。

私の右手には今もあの時の傷痕が残っている。
私は今夜も風呂のドアを勢いよく足で開ける。
浴槽の中でどんな出会いが待っているだろうか、
楽しみにしながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2247a/>

私とワニとピラニアと

2010年10月17日03時32分発行